

## やんばるの森調査報告書（国頭村辺戸区）

第二東京弁護士会  
公害対策・環境保全委員会 御中

平成 13 年 10 月 30 日

参加委員 工藤一彦・野村修一  
尾本太郎・井口敬明

報告者 委員 井口敬明

10月20日午前10時頃より、国頭村の一般廃棄物最終場建設予定地周辺のやんばるの森を視察した。土曜日にもかかわらず、地元辺戸区の住民の方（佐久真克也氏）が忙しい中案内役を買って出てくれた。ここに記して御礼申し上げる次第である。

出発時点では、小雨が降っていたため、雨具を装備して調査に備える。国頭村役場の説明によれば、最終処分場周辺は、自然林ではなく、人造林とのことである。日本自然保護協会発行の「自然保護」1995年別冊でも、当該予定地は、樹齢30年以上のイタジイ（シイノキの一種。正式な和名はスダジイだが、沖縄では一般にイタジイと呼ぶ）の自然林地域とはなっておらず、二次林地域とされている。しかし、最終処分場への取付道路付近に明らかに植林されたと分るリュキュウマツが見受けられたものの、その他は、一見する限りでは、自然林と区別つかない。もっとも、処分場予定地の大半は、既に皆伐されており、伐採前の状態を思い描くのは困難であった。伐採された木は、確かに若い木も多いようであったが、幹の太さから相当の樹齢を推測させる木もあった。

佐久真氏先導の下、我々は、処分場予定地の下部の森に入っていった。処分場は自然の地形を利用して作られるため、谷に位置しており、谷沿いの林道を歩いていく。歩き始めて間もなく、不意に、佐久真氏が、林道から谷底に向かって降りていった。全く道筋もないため、我々は一瞬躊躇したが、急峻な崖を下りついて行く。崖の途中で、茶色がかった緑の体色のカエルを見つけた。沖縄県の天然記念物に指定されているハナサキガエル（沖縄島固有種。毎年ほぼ決まった場所で産卵するため、森林の改変と産卵場所の破壊や赤土による汚染が大きな脅威とされている）と思われる。ただ、同種は、レッドデータブックの絶滅危惧類に分類されており、1990年代に入ってから確認された記録がないほどの希少種であるため、同定する自信はない。

さらに赤土で滑る崖地を下っていくと、沢筋に出た。先般の台風の影響もあるのか、どこから水が流れ出てくるのか分らないが、処分場予定地方向から海に向かって水が流れている。

しばらく歩くと、木組みで作った土砂止めのようなものがあった。村が、赤土流出防止のために作ったフィルターだという。確かに、木枠の両側は、ウレタン素材のようなものでサンドイッチされ、中には小枝などが詰められていた。しかし、一般にフィルターは、まずウレタンやウールなどの素材で物理的に濾過し、その後バクテリア等が発生しやすい多孔性の物質を用いてバクテリアによる生物濾過を施すのが普通であるが、現地で見ただけでは、いずれの効果も多

くを期待しがたいものであった。それはともかく、台風の直後などは、皆伐された山から赤土が流出し、それが確実に海に向かって流れ出ていくことは想像に難くない。処分場問題はさておき、現状において、赤土流出防止の手段を施すことは最低限必要であろう。

沢沿いに海に向かって歩いていく。突然佐久真氏が、奇声をあげて飛び跳ねたので、何かと思うと、ヒメハブが樹上から落ちてきて、足先を横切っていったそうである。それから後、我々は、沢を下る際に手をつく時も、間違っただハブをつかんでしまわないよう確かめつつ、ますます慎重になり進んでいった。ただ、皆このようなフィールドワークにはあまり慣れておらず、各自少なくとも1回は尻餅をついたり転んだりして、悪戦苦闘していた。今後は、フィールドワークもより一層重視して積極的に行っていくべきであろう。

約1時間ほど沢筋を下っていったが、時間の制約もあって折り返すこととなった。折り返し地点には、樹高20メートルはあろうかというガジュマルの大木が巨立し、我々を睥睨していた。頭上はるかな高みから気根がたこ足状に地上に伸び、幹や枝のいたるところにオオタニワタリ(常緑の多年草。レッドデータブックの危急種に分類。自生地は限られ、乱獲により個体数は激減している)などの着生植物が生い茂り、とても一本の木には見えなかった。沖縄では、ガジュマルの木にキジムナーという妖精が住んでいるとの言い伝えがあるが、まさに妖精がいても不思議でない神秘的な光景であった。

行き帰りの道すがら、青と黒のツートンカラーの羽をもつリュウキュウハグロトンプ(タイワンハグロトンプの琉球列島の固有亜種。奄美大島、徳之島、沖縄島に分布)を何度も見かけた。これも、レッドデータブックに希少種として分類されている。やんばるの豊かな生態系を感じ取ることができる。同時に、これらの希少種がやんばる他ごく限られた地域にしか生息していないことからすれば、残された同地を保全する必要性は極めて高いと言える。

さらに、イタジイやガジュマルの巨木、それらに着生したオオタニワタリ、太古の昔にタイムスリップしたかのようなヒカゲヘゴの群生など、豊かな植物群に抱かれていると、そのままここにとどまっていたい気持ちになってくる。

そのような場所があるというだけで、そして、たとえそこに何度も足を運ぶことができなくても、その場所に想いを巡らせるだけでも、人の心に潤いをもたらしてくれる。やんばるの森は、そういう場所だと感じた。

残念ながら、我々の調査目的の一つであったノグチゲラを目撃することはできなかった。ただ、イタジイに作られたノグチゲラの巣穴は、いくつも見かけしており、この場所に確実に生息していることが分った。

また、この沢筋を下っていくと出る海岸は、ウミガメが産卵に来るほどの静謐な場所であるが、そこまで行くのは時間が許さなかった。

我々は、いくつもの心残りや落し物を置き残したまま同地を離れたが、再びそれらを拾い集めるために、再訪したいと思っている。これからも、やんばるの森が何ら変わることがなく、我々が去ったときのまま出迎えてくれることを祈念して止まない。

以上